

氏名	三橋 さゆり
ヨミガナ	ミツハシ サユリ
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博音第245号
学位授与年月日	平成26年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 児童の歌唱における表現の形成過程に関する研究ーグラウンデッド・セオリー・アプローチに基づいてー

論文等審査委員

(主査)	東京藝術大学	准教授	(音楽学部)	山下 薫子
(副査)	東京藝術大学	教授	(音楽学部)	佐野 靖
(副査)	東京藝術大学	教授	(音楽学部)	塚原 康子
(副査)	東京藝術大学	准教授	(音楽学部)	平松 英子

(論文内容の要旨)

研究の目的は、歌唱活動において児童が歌唱を通して創造性豊かな表現を形成するようになる学習プロセスと、児童に表現を促す教授プロセスを解明することである。そこで本研究では、楽曲を介して教師と児童及び聴衆が相互に作用しあうコミュニティにおいて演奏が生成され、その過程で児童の表現力が育成されていくという視点から、創造性豊かな歌唱表現を形成していく過程を明らかにした。

本研究では、歌唱活動に定評のある暁星小学校聖歌隊を研究対象に、活動の観察と教師や児童へのインタビューから得られたデータを基にテキストを作成し、現象の構造とプロセスを分析する方法であるグラウンデッド・セオリー・アプローチ（戈木クレイグヒル2006ほか）を用いて分析することで、現場に密着した理論を構築した。

本論文は5章構成となっている。第1章では、教師と児童、あるいは児童同士の間関係性を基盤とした社会的環境の設定に関して、児童が歌唱の基礎技能や表現の手立てを獲得するために適した環境とはなにか、そして教師は児童が表現するようになるために、どのように環境を設定しているのかという問いを設定し、児童が所属する歌唱活動のコミュニティでの学習を成立させるために必要な条件を明らかにした。本研究の対象校の活動では、一斉に系統的に学習する部分と、成員の相互関係で成り立っている学習の両者を組み合わせることにより、限られた時間の中で、歌唱の技能や表現の手立てを習得していく。本章では、これらの学習の基礎になる聖歌隊のコミュニティの仕組みについて分析した。

次に第2章では、児童の意欲の変化に関して、歌唱の基礎技能や表現の手立てを習得したり、楽曲を解釈したりする過程で、児童の歌唱に対する意欲がどのように変容しているのか、教師の働きかけが児童の歌唱に対する意欲の変容にどう影響しているのかという課題について検討した。加えて、表現活動を通してどのように意欲が変容するのかを検討することで、児童の歌唱への価値観がどのように変化するかについても考察した。

第3章では、1つの楽曲を学習するプロセスを明らかにするために、初めて知る曲の譜読みから発表までの約2ヶ月半の練習過程を調査し、児童の楽曲に対する理解の度合いや習熟度に応じて、楽譜通りに歌唱する学習、発声技能の習得、表現のゆらぎに関する学習、楽曲を解釈して聴衆に伝えようとする行為という4つの局面の比重が変化していくそのプロセスを詳述した。

第4章では、歌唱の基礎技能の習得過程を解明した。表現に必要な歌唱の技能を獲得するために必要な学習プロセスはどのようなものであるのか、児童が歌唱の技術を獲得する際に、教師が指導あるいは提示していることはなにかを検討した。

第5章では、楽曲を解釈してその表現を聴衆に伝えようとするプロセスに迫った。児童は歌唱の基礎技能や

表現の手立てを獲得する過程で、楽曲をどのように解釈するようになるのか、児童が楽曲を解釈するときに、教師はなにを指導しているのか、どのような活動を経験することで、児童が他者に自分たちの歌唱表現を伝えたいと考えるようになるのかを明らかにした。

結果として、創造性豊かな歌唱表現の形成に必要な要素は次の3点であると考ええる。

1. 児童が楽曲を解釈して他者に伝えるようになるためには、楽曲の表現に関する【問題の発見と共有】を児童が行うことが重要である。
2. 歌唱表現に関する問題は、楽曲を介した教師と児童及び聴衆による相互作用が成立するコミュニティにおいて発見される。
3. 児童の歌唱活動に対する意欲や歌唱の基礎技能の習得が【問題の発見と共有】と関連している。

なお、本研究の結果は、小学校で行われる歌唱の課外活動に貢献できると考えられるが、小学校で行われる音楽科授業への応用に関しては、異学年の児童による活動であることや時間的制約が比較的緩和であることなどの課外活動特有の条件を考慮すべきであり、更なる研究が必要であると思われる。また本研究は、グラウンデッド・セオリー・アプローチの手法において、非言語のコミュニケーションが含まれる事例を扱った点で新たな可能性を探ったと考えられる一方、歌唱の評価に関しては、客観性の担保に関して課題が残されている。今後は、歌唱の変化を評定する人数を増やすなどして、より客観的な結果の提示を目指したい。

#### (総合審査結果の要旨)

教授・学習過程を解明することにある。申請者は、5年以上にわたって、歌唱力に定評のある暁星小学校聖歌隊に密着し、参与観察を実施してきた。活動の内容を、メモとICレコーダー、ビデオカメラにより記録するとともに、児童を対象とした質問紙調査と、教師及び児童を対象とした聞き取り調査を行い、得られたデータを基にテキストを作成して、これをグラウンデッド・セオリー・アプローチ(Grounded Theory Approach、以下GTAと略記)によって分析してカテゴリー関連図にまとめ上げ、理論を構築した(第3章を除く)。客観性を担保するために費やされた膨大な時間と労力が、217頁に及ぶ附録の分析資料によって裏づけられている。

本論は5つの章からなる。まず、第1章では、社会的環境の設定に着目し、コミュニティでの学習が成立するために必要な条件を導き出した。第2章では、学習意欲の変容という観点から、児童の学習過程と教師の働きかけの意味、そして歌唱に対する児童の価値観の変化について考察している。第3章では、1つの楽曲を仕上げる2ヶ月半の過程を追い、習熟度に応じて学習の重点が変化する様子を描き出した。第4章では基礎技能の習得、第5章では楽曲の解釈と聴衆に伝える行為の観点から、教師の働きかけと児童の変容をそれぞれに明らかにした上で、創造性豊かな歌唱表現の形成に必要な要素として「問題の発見と共有」を挙げて、これが教師、児童、聴衆の相互作用によって成立するような社会的環境の設定が重要であると主張している。

本研究の学術的な意義は、次の2点に集約されるだろう。(1) 小学校における歌唱活動とその教授・学習過程について、多角的かつ綿密な考察を行ったこと。(2) GTAという研究手法に対して、音楽教育学の立場から新たな可能性を切り開いたこと。(1)について、本研究の対象が課外活動であるため、その成果を授業にそのまま適用することはできないものの、表現の形成過程に関する理論を提出した意義は大きい。また(2)については、これまで日本の音楽教育学の分野でほとんど用いられてこなかったGTAの手法が、音楽の知覚・感受とその相互作用を基礎とする研究領域にも適用可能だということを示したことにより、今後の質的研究のあり方に一石を投じたと言える。

口頭試問では、次のような問題点が指摘された。(1) 各章で得られた理論の関係性と、第3章の位置づけが判然とせず、本論文の結論の導き出し方に疑問が残ること。(2) 「コミュニティ」、「表現のゆらぎ」など、概念規定が不十分な用語が散見されること。(3) 抽象化の過程で捨象された個々の情報や児童の生の声を論述の中に生かす工夫が必要であること。

このように、今後、解決すべき課題がいくつか残されてはいるものの、実践の場に根ざした教授・学習の

理論を打ち立てた功績は評価に値するものであり、音楽教育学の課程博士にふさわしい優れた研究成果を上げたと判断して、合格とした。